



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4178 号 2018.1.30 発行

26 歳「発達障害」と一途に向き合う彼の生き方 当事者だからこそ似た境遇の子を支援したい 姫野 ケイ：フリーライター



東洋経済 2018 年 01 月 29 日
金井塚悠生さん (26 歳)。高校 2 年生のときに ASD と診断された

独特なこだわりを持っていたりコミュニケーションに問題があったりする ASD (自閉症スペクトラム障害/アスペルガー症候群)、多動で落ち着きのない ADHD (注意欠陥・多動性障害)、知的な遅れがないのに読み書きや計算が困難な LD (学習障害)、これらを発達障害と呼ぶ。

今までは単なる「ちょっと変わった人」と思われてきた発達障害だが、前頭葉からの司令がうまくいかない、脳の特性であることが少しずつ認知され始めた。子どもの頃に親が気づいて病院を受診させるケースもあるが、最近では大人になって発達障害であることに気づく人も多い。

発達障害により生きづらさを抱えている人のリアルに迫る本連載の第 5 回目は、ASD の金井塚悠生さん (26 歳)。現在、大阪府に在住し、発達障害などの障害を抱える子どもの支援施設で働いている。当事者としてどのような目で発達障害の子どもたちを見つめているのか。また、本人はこれまでどのように生きてきたのか。LINE 電話で取材を行った。

二次障害がひどく、高校を中退

金井塚さんが ASD の診断を受けたのは高校 2 年生のとき。1 対 1 のコミュニケーションだとうまくいくが、対大勢の会話となると自分がどのような役割で動いていいのかがわからなくなる。



「小さい頃は社交的な傾向が強かったのですが、思い込みが激しくて突っ走ってしまい、自分の気に入らないお友達を排除しようというガキ大将的な面もありました。母親は臨床心理士だったので、僕の凹凸 (できることとできないことの差があること) に気づいていたようです。

小 3 の頃は、少し仲間外れのようなものにあっ

てしまいました。でも、もともとプライドが高いので、クラスの中で認められようと勉強と運動を頑張ったら、サッカーがうまくなったんです。それで、『サッカーもできるし、なんかおもしろいヤツ』みたいな立ち位置になって、うまく適応していたように思います。

でも、そのまま公立中学校に通うと、僕にとっては不利になりそうな内申点を含めた高校受験をすることになるのを母が心配し、中高一貫の中学受験を勧めてきました。僕はあまり受験にピンときていなかったものの、受験勉強を始めるとぐんぐん成績が上がり、大阪

でトップの私立進学校に入学しました」(金井塚さん)

金井塚さんの部屋。「常に興味のあるものが移り変わっていく様子が表れている」とは本人談。note (<https://note.mu/cherryphoenix>) で情報発信している(撮影: 延原 優樹)



中学でも引き続き、勉強と運動に打ち込んだ。そのおかげで、成績は常に上位、入部したテニス部でも試合で活躍し、良い成績をおさめられた。いじられキャラではあったが、楽しく過ごせていたという。

しかし、高校に入ると睡眠リズムの乱れ、自律神経失調症、音が異様に気になって部屋の窓を二重サッシにするまでの聴覚過敏、過敏性腸症候群といった、金井塚さんのような ASD の人の一部に特有とされる二次障害の症状に悩まされ、不登校気味に。これらの二次障害が日常生活に大きな支障をきたし、そのまま高校を中退せざるを得なくなった。

大学受験や就活も「独りよがり」に

とにかく、こちらに話すすきを与えないほど、マシンガンのように話し続ける金井塚さん。あちこちから新しい話題が降ってきて話が散乱状態なので、正直なところ、この記事をもとめるのにもかなり悩んだほどだった。金井塚さん自身にその自覚はあるのだろうか。

「情報量が多く、一方的にしゃべってしまうというのがあります。対面で相手の反応を見ながらしゃべったり、相手の気持ちを察したりするのも苦手です。でも、いちばん困っているのはさっきも言ったように、二次障害のほうですね。これが勉強にも支障をきたしました」(金井塚さん)

大学は関西の中堅私立校へ進学。しかし、その受験勉強は苦労の連続だった。

「ADHD ではないと思うのですが、ちょっとした多動傾向のようなものがあるんです。受験勉強中に 1 つの教科をずっと勉強するのが無理だし、同じ参考書を何度も解くということもできないんです。だから、いろんな参考書をひたすら買いまくるといって……。それこそ落ちる人の典型的なパターンですよ(笑)。しかも、自分が興味のある分野は深みにハマっていくんです。好奇心は旺盛なので、試験には出ないようなある特定のマニアックなジャンルにばかりどんどん手を出して行って……」(金井塚さん)

大学時代はキャンパスライフを謳歌できた。環境が適応すると過活動になる面があり、毎日が楽しくてたまらなかった。また、この時期に障害者手帳も取得。発達障害で手帳を取得するには大量の書類と複雑な手続きが必要だと聞いたことがあるが、金井塚さんの場合は臨床心理士である母親に知識があったため、スムーズに取得できたという。

そして、就職活動の時期に突入。今までの勢いのままインターンの面接に挑んだところ、出鼻をくじかれてしまった。

「大学で募集をしていたインターンの面接は、企業の方と大学の先生が面接官でした。僕は大学時代、かなり積極的に企業の人と活動していたんです。今思うと勘違いなんです、自分はわりと仕事ができるほうだと思っていました。意気揚々と自分の経歴や長所を『あれもできます』『これもできます』『こんなすごいことをやっています』っていうのを全部詰め込んだ濃い密度のエントリーシートを持って面接に挑んだところ、面接官からの第一声が『君、独りよがりの傾向があるよね』でした。

インターンの仕事内容自体はもっとマイルドで、地道な事務仕事などを依頼されると思うのですが、『そういうのもできますか?』という質問をされ、もちろん表向きには『できます』と答えました。でも、『コイツ、きっとそういう仕事には興味を持たないだろうな』と面接官は思ったのだと今になってわかります。もちろん、この面接には落ちました』(金井塚さん)

就活も成功したとは思っていない

就活も、大学受験のときと同じで自分の中では成功したとは思っていないという金井塚さん。最初のインターンの失敗から学んだおかげで、その後はだんだんとインターンに通るようにはなったが、その後は希望の就職先の内定を取ることよりも、OB訪問をしたりインターンに行ったりと、就活自体が楽しくなってしまう、目標がぼんやりとしてきてしまった。希望としてはマスコミや出版社、広告代理店に行きたかったが、最終的には大手出版取次と大手教育系、ベンチャーの内定が出た。

「もともと教育には興味があったので、内定をもらった教育系の大手企業に入社しようかなと思っていました。でも、営業職で地方に出張があるということを知ったらとても怖くなってしまって……。転勤もあるので、ずっと関西に住んでいたいという気持ちも高まっていました。

それで一度、内定者の集まりの際に人事の方に『実は発達障害と診断されているんです』とカミングアウトしたんです。自分としてはそれで、障害者雇用として別の部署に異動できるような配慮があるのかなど期待していた部分があります。でも、会社側としては普通の枠で内定を出しているのだから、営業職のままいてほしかったようです。今思うと、とても良い言葉をかけてもらったと思うのですが、当時の僕はプレッシャーに押しつぶされてしまい、内定を辞退してしまいました」（金井塚さん）

結局、大手出版取次へ入社。ここでは物流の部署へ配属されたが、これは金井塚さんにとっていちばん苦手なジャンルの仕事だった。

「行動力はあるので、毎日新しいことを学んだり人に会ったりするのは好きです。一方で、毎日同じところに行って机に座って同じ業務を繰り返す……というのは非常に苦手なんです。ここでの仕事は、物流センターに届けられる商品を見て不良品がないか探したり、ラベルを張ったりと、地道で複雑な工程を繰り返して管理する作業です」（金井塚さん）

「その工程がどうしても覚えられなくて、ミスばかりしていました。あまりにもミスが目立つので上司に『実はこういう障害があつて……』と相談をすると、人事部にかけあってくれ、全然違う企画系の部署に異動させてもらえました。やはり、自分が興味を持ってない対象のものをエクセルなどで数値化して管理するのはすごく苦手です」（金井塚さん）

独特な体のバイオリズムと付き合いながら働く

また、金井塚さんは二次障害の1つとして独特なバイオリズムがあり、夏場や冬場は生産性が2割ほど落ちる。過眠体質でもあり、睡眠は1日10時間必要だ。金井塚さんが当初志望していたマスコミや広告代理店は激務で睡眠が十分に取れないという話をよく聞く。金井塚さんのやりたいことと体のコンディションは対極状態にあったのだ。

筆者も睡眠時間は8時間ないと頭が回らず、イライラして食欲も落ちてしまう節がある。そんなとき、周りの人は短時間睡眠でも力を発揮できているのに自分は甘えているのではないかと自分を責める。金井塚さんにもそのような葛藤はあるのだろうか。

「それはすごくありますね。発達障害の人って、過活動な面があるのでどっと疲れたり、変なところで刺激を受けて疲れちゃったりすることが多いと、ある本で読みました。特に受験のときなんかは、周りの人が自分より頑張って勉強しているのに、自分は少し勉強しただけで疲れてしまうし、そこから回復するのも時間もかかる。言葉を選ばずに言うと、『不良品』というか。受験生という観点だけでみると、恐ろしく効率が悪いので、やっぱり自分はダメ人間なんだと、すごくつらかったです」（金井塚さん）

現在、金井塚さんは転職し、独特な体のバイオリズムがうまく適応できる職場で働いている。冒頭でも述べた通り、発達障害などの障害を抱える子どもの支援施設だ。「放課後等デイサービス」といって、発達障害を抱える小1〜高3までの子どもが通うことができる。シフトは基本、昼の12時から夜21時まで。症状の1つとして朝起きるのが難しいという点を気にしないでいい働き方だ。発達障害の子ども向けの学習支援とはあまり耳にしたことがない人もいるだろう。具体的にどのような施設なのだろうか。

「大きく分けると、学習支援とソーシャルスキルトレーニングを実施しています。学習支援だと、たとえば通常の学校で漢字は、何度も書き取りをして覚えさせます。でも、発達

障害の子どもだと何度も書き取りをするのが苦痛で耐えられない子もいる。だから、目で見て覚えるのが得意な子には漢字の意味を表しているようなイラストが描かれた教材を使ったり、表意文字のような漢字は成り立ちから基礎的に話していったり。視覚的な部分を使って覚えるために部首などが色分けしてある教材もあります。1人ひとり、学び方のアセスメントをとりながらコーディネートしていく支援といった感じです。」(金井塚さん)

「ソーシャルスキルトレーニングは、一言で言うと、社会で自律して生きていくために必要な能力を学ぶ学習です。その最も重要で中心的なスキルとして、コミュニケーションスキルがあり、そのコミュニケーションスキルを学ぶ手段として、ケーススタディやロールプレイングゲームがあります。

たとえば、『●●ちゃんは■■君にこう言いました。●●ちゃんはなぜ■■君にこんなことを言ったのか、考えましょう』というような、本音と建前みたいなテーマでロールプレイングゲームの実践があります。

でも、学習支援にしるソーシャルスキルトレーニングにしる、指導員によって教え方は全然違います。僕はもともと、クリエイティブなことをやりたいと思っていたので、この子はこういう教え方をしたら喜ぶだろうなあと想像しながら教材を準備して、それまで全然興味を持っていなかった子どもが急に目の色を変えて楽しそうにしていると、すごくやりがいを感じます」(金井塚さん)

当事者として発達障害の子どもを見ている金井塚さんは、自分の子どもの頃と重ねてしまうこともあるという。そして、この子の特性は少し改善したほうが将来生きやすくなる、でもこの子のこの部分は残しておいても他でカバーできるかも、と未来的な視点で子どもを見守っている。

個性として片付けるだけでは不十分

今回、金井塚さんは自らこの取材を受けたいと **Twitter** でダイレクトメッセージを送ってきた。最近ではタレントなどの著名人が発達障害をカミングアウトし、発達障害がアイデンティティとなって成功する人がいることが一般的だと思っている人がいることにモヤモヤを抱いているとも語る。

「発達障害を凹凸として捉えることはアリだと思うんです。今まで発達障害の人って『ちょっと変わった人』みたいな感じで特別な診断は受けずに生活をしてきた人が多かった。でも、今は診断を受ける人が増えていて、世の中に発達障害という言葉が広まっています。一方で、顕在化されつくしたことにより再び顕在化しているようにも思います。みずから発達障害を告白している **SEKAI NO OWARI** の **fukase** さんみたいに、発達障害を持っていながら、その個性ですごく成功した人もいます。

ただ、自分を含めて特別な才能を持っている人のほうが少ないのではないかと考えています。自分自身もそうでしたが、文系で特に資格も持たずに大卒で就活をする際、いちばん求められるのはコミュニケーション能力や集団への適応性、バランスよくマルチタスクをこなすことです。

でも、発達障害を抱えていると、ここにうまく適応するのは相当難しいと実感しました。だから、社会全体の認識としては、個性で片付けるのではなく、抱えている深刻な課題を把握して、社会に適応できる環境を作るべきだと思います」

目まぐるしく変わりゆく話題に頭がクラクラするような取材だった。発達障害でつらいのは二次障害をはじめ、枚挙にいとまがないが、何よりもつらいのは「孤独」だと金井塚さんは語る。

周りが楽しそうにしている、自分には何がおもしろいのかかわからない。自分の好きなことややりたいことを一生懸命語っても、相手に響かない。そのようなズレは発達障害の人にしかわからない。この孤独を埋める方法はあるのか。それを探すのも今後の課題になりそうだ。

少女はなぜ裸の画像を送るのか

写真：アフロ



(ネットワーク報道部記者 栗原岳史 吉永なつみ)

子どもたちの悲鳴

「SNSで知り合った自称高校生に裸の画像を送ってしまった。親にも言えない…」



NHKニュース 2018年1月29日
あなたのお子さんや、身の回りの友達
は、SNSに自分の画像を安易にアッ
プしていませんか？ いま、SNSを通
じて知り合った人にだまされたり、脅
されたりして自分の裸をスマホで撮影
し、メールなどで送られる女子中
学生や女子高校生の被害が急激に増
えています。被害の背景には、親や友
達にも相談できず、見知らぬ相手
にいつのまにか追い込まれていく、
巧妙な手口がありました。

これは、東京都が運営するネットの
トラブルに関する相談窓口「こたエ
ール」に今月寄せられた女子学生
からの被害の相談です。相談を受け
付けるスタッフによりますと、この
1～2年で同じような相談が増加し
、とくに趣味が合ったり、悩みの
相談にのったりするうちに親しく
なった相手から、突然、裸の画像
を要求されるケースが多いとい
うのです。

「さすがに嫌だ」と断っても、これま
でに送った顔写真や、プライベートの
情報をネット上で拡散するぞと脅さ
れ、言われるがままに裸の画像を送
る少女もいるということです。脅し
た相手は男性の場合もあれば、少
女と同性を名乗るケースもあります
。いずれの場合もツイッターや友
達募集のアプリを通じて、はじめ
は音楽やゲーム、漫画などの同じ
趣味の話題で親しくなっているた
め、相手への警戒心が低いところ
につけ込んでいるのが特徴です。

「同じスポーツをしている人と知り合
いたくて、SNSでいろいろな人を
フォローしていた。相手が卑わいな
話をして、やり取りをしていると、
急に胸の写真を送ってほしいと言
われた」（「こたエール」への相
談事例より）

相談員は、ネット上では経歴や性別
をいくらでも詐称することができる
ので、信頼できると考えたとしても
、プライベートの画像を送るのは
絶対にしないでほしいと呼びかけ
ています。

どのように少女に近づくか

では、どのような人物が少女に近
づいて画像を送らせるのでしょうか。

警察によりますと、今月23日、
児童ポルノ禁止法違反の疑いで逮
捕された福岡県の30代の男は、
女子中学生に近づく際、SNS上
で同じ年の女子を装っていました
。男は架空の設定を作りあげて、
アプリを通じて学校などの話を
して共感を得てから「私も同じ
学年だよ」と持ちかけ、インター
ネットなどで入手したと見られる
女の子の画像を送りました。そ
して、「私も送ったからあなたも
見せてよ」と要求し、女子中
学生に裸の画像を送らせたとい
うことです。

男のスマホからはほかにも数百
枚の未成年と見られるわいせつ
な画像が見つかっているという
ことで、警察が余罪を調べていま
す。

急増する被害の実態は

警察庁のまとめによりますと、おとし、児童ポルノ事件でだまされたり、脅かされたりして自分の裸の画像を送るいわゆる「自画撮り被害」に遭った子どもの数は480人にのぼります。この5年間で2倍に増えました。

被害に遭った子どものうち中学生は52%、高校生は39%、そして、小学生が5%でした。多くの場合、加害者とは面識がなかったということです。



抵抗感小さい心理を悪用か

社会心理学が専門で、子どもとネットの関係について詳しいお茶の水女子大学の坂元章教授は、若い世代の間で「自画撮り」が日常化し、SNS上で自分の画像を送ることへのためらいが小さくなっていることが被害の背景にあると指摘します。

坂元教授は「自分の画像を発信することに抵抗感が小さい心理が悪用されている。中学生や高校生には、

ほかの人に見られたくない写真は、友人や恋人など、よく知った人であっても、共有してはいけないという基本をよく知ってもらう必要があります、これまでの被害事例などを家庭や教育現場で伝えていくことが求められている」と指摘します。

被害防止に乗り出す自治体

相次ぐ被害を受けて東京都では、2月1日から全国で初めてとなる「自画撮り被害」を防ぐための罰則付きの条例が施行されることになっています。

児童ポルノ禁止法はわいせつな画像を実際に送らせた時に適用されますが、条例では18歳未満の子どもに対し画像を送るよう要求する行為を禁止します。しつこく画像を要求された際に、その場をしのごうと送ってしま



い、被害が拡大するケースも多いことから、送る前の要求の段階で規制しようという狙いです。違反した場合は罰金刑が科されるほか、画像を要求する加害者が東京都以外にいても取り締まりができるとしています。

東京都は、条例の施行に向けて被害防止の啓発にも取り組んでいて、今月、杉並区の中学校で行われた講習会では、専門家の講師が全校生徒に向けてSNSを利用するときの注意点などを説明しました。

同種の条例は、兵庫県でも4月から施行されることになっています。

マンガで手口を知ってほしい

被害を受ける子どもたちの支援にあたっているのは、自治体や警察だけではありません。NPO法人「ライトハウス」は、「自画撮り」をめぐる子どもや親からの被害の相談に応じています。

少しでも被害を減らそうと、女子生徒が被害を受けた実例をもとにしたマンガを作成し、全国の中学校や高校などに配っています。若い世代にわかりやすく、関心をもって読んでもらおうというのです。



「ライトハウス」は、「自画撮りをめぐる警察の摘発は相次いでいるが、相談しにくいケー

スが多く、摘発に至るのは全体から見ればごく一部だと思う。被害に遭ってしまった場合、絶対にひとりで抱え込まず、警察や支援団体などに相談をしてほしい」と話しています。SNSで画像がいったん拡散すれば、すべてを消すのは不可能に近いと言われていました。自分の子どもがSNSを通じてどのような人とやり取りしているか逐一チェックするのは難しいと思いますが、これを機会に、プライベートな情報のやり取りをすることがどんな危険や被害を伴うのか、話し合ってみてはいかがでしょうか。

遠野に「渋谷センター街」を 生きづらさ抱える子の居場所づくりへ、元ガングロギャル奔走

河北新報 2018年1月29日

「遠野に渋谷センター街を」と呼び掛ける富川さん(左)と彼女を慕う女子高生



岩手県遠野市に「渋谷センター街」をつくらうと、元「ガングロギャル」がインターネットのクラウドファンディング(CF)で賛同者の出資を募っている。市中心部の商店街の空き店舗を改装し、生きづらさを抱える子どもたちの居場所づくりを目指す。

東京都出身の個人事業主富川万里さん(31)は、大学卒業後の2012年に遠野市へ移住。市の起業家

育成事業などに携わる傍ら不登校やいじめ、家族との関係に悩む中高生たちと知り合った。

富川さん自身、10代の頃は学校になじめず、家出を繰り返す「非行少女」だったという。自分の居場所を探して東京・渋谷のセンター街に繰り出した。

奇抜な髪形や服装で自己表現するエネルギーに満ちた街が鬱屈(うっくつ)した自分を否定せずに受け入れてくれ、ガングロスタイルで仲間と毎日のようにたむろした。

「私はセンター街に救われた」と富川さん。「個性が認められ、学校や家庭以外の人との交わりから可能性を伸ばせる場所を遠野にもつくりたい」と語り、フリースペース開設や映像編集技術の講座開催などの構想を練る。

「一つの価値観を押し付けることなく、さまざまな経験を基に助言をしてくれる。物事の見方や考え方で学ぶところが多い」と富川さんを慕う中高生も多い。

注意欠陥多動性障害(ADHD)のある富川さんは夫の岳さん(31)ら周囲に支えられながら「多様性を尊重し、補い合う社会は誰もが生きやすいはず。今回の挑戦を通じて発信していきたい」と意気込む。

CFによる調達目標は350万円。2月25日まで専用ウェブサイト「キャンプファイヤー」で受け付けている。富川さんの連絡先は電子メールアドレス i.etomi@nextcommons.co.jp

<NPOの杜>垣根越え共に音楽表現

河北新報 2018年1月29日

仙台市では2016年に「障害者差別解消条例」も施行され、障がいのある人とない人の壁は低くなりつつあるかに見えます。それでもなお、障がいのある人がない人と同じように外出したり趣味を楽しんだりできる社会になったとは言えません。

また、そもそも障がいのある人と身近に接した経験がなく、いざ会ったときに身構えてしまう人もいます。差別とまではいかずとも、まだまだ私たちの心の中には壁があり、ともに楽しむ機会自体が少ないのが現状です。

その垣根を越え、コミュニケーションを取る手段として音楽が有効だと、毎年6月、仙台市青葉区の勾当台公園を中心に、障がいのある人もない人も、ともに音楽表現を楽しむ「とっておきの音楽祭」が開催されています。運営するNPO法人とっておきの音楽祭は、回を重ねるごとに、徐々に地域住民や商店街の理解も得られてきた他、当初は屋外イベン

トに及び腰だった障がいのある人たちも外に出る意識が強くなったといえます。

今では、仙台から始まった音楽祭が県内外18カ所で開催されるまでになりました。今年6月3日。障がいの有無を越え、あなたも一緒に音楽を楽しみませんか。

(認定NPO法人杜の伝言板ゆるる 大西直樹)

座り姿重視「さかさまデニム」 車いすではきこなす 東京新聞 2018年1月29日
昨年11月に東京・新宿で開いた展示会の会場で「さかさまデニム」をはきななざわけいこさん



車いすに乗っても、おしゃれに見せたい。事故で車いす生活になった千葉県の女性が、そんな思いをかなえるデニム生地ズボンとスカートとを十年がかりで開発した。一般の服は立ち姿からデザインされるのに対し、「座った姿に合うように」と逆の発想から生まれた服は、名付けて「さかさまデニム」。インターネットで販売し、好評だ。(神谷円香)

開発者のななざわけいこさん(42)は、世界的デザイナーを数多く輩出した文化服装学院(東京都渋谷区)で学んだ。卒業から四年後の二〇〇〇年、スノーボード中の事故で脊髄を損傷し、車いす生活に。お気に入りだった細身のスリムジーンズ

がはけなくなった。

既製のズボンは、脚を伸ばして立った姿勢に合わせているので、車いすに座ったままだと腰回りが食い込み苦しくなる。楽に座るには、ぶかぶかのズボンをはくしかない。「ないなら自分で作ろう」。一念発起し、〇六年ごろから試行錯誤を始めた。

伸縮性のあるデニム生地を選び、後ろの股上を延ばして腰回りに余裕を持たせた。座ったまま脱ぎ着できるように、ファスナーはできるだけ長くした。できたのは、立つとお尻の部分がぽっこりと出たデザイン。試作段階で見せた母校の学生から「かわいい」と好評だった。

同様にお尻が出たスカートも作った。工夫したデザインは一五年に意匠登録。一六年春、「カムパネルラ」というブランド名でネット販売を始めると、「はきやすい」「こんな服が欲しかった」と反響を呼んだ。

別のデザインや子ども服も手掛けたいが、一人では限界があるという。「選択肢がたくさんある時代なのに、私たちが選べる服は少ない」とななざわさん。恩師で開発の相談に乗ってきた文化服装学院の文化・服装形態機能研究所長、伊藤由美子さん(65)も「衣食住は生活の基本。着られる服だからといって何でも良いわけではない」と話す。

購入、問い合わせはカムパネルラのサイト(「さかさまデニム」で検索)から。価格は税抜き、送料別でズボンが一万四千八百円、スカートが一万二千元。

◆大手メーカーも研究に乗り出す

障害のある人にも着やすい服を、オーダーメイド以外で大手アパレルメーカーが生産するのは採算面で厳しい。そんな中、オンワード樫山(東京)は一六年から、文化・服装形態機能研究所と研究に乗り出し、車いす利用者三人のサイズを測ってサンプルを作った。

座ったままでも着崩れしないよう、上着のボタンの位置やズボンの形を工夫。今のところ発売の見通しはないが、オンワード技術開発課の秋山和雄さん(67)は「スーツは技術的に難しい。ただ、イージーオーダーならできるめどがついた」と手応えを感じている。

